

商家同族団と祖先祭祀・事業經營

——長野県小諸町の小山家の場合——

松村敏

一はじめに

二小山家の構成と商業活動

三小山家の同族結合

四各商家經營の展開と同族団

五製糸業經營と同族団

六おわりに

(付) 資料 小山一族家憲

論文要旨

本稿は、明治中期～昭和初期における長野県小諸町の有力商家小山家の同族団・祖先祭祀・事業經營の実態と相互の関連について考察したものである。

小山家同族団は、異業種混在の商家同族団であり、各經營は祖先祭祀を機軸とする同族団の合意の下で展開された。またこの同族団は、本分家の主従関係が強固な同族結合ではなかつたが、本家の經濟的優越性とそれに基づく分家の扶養行為、本家の祖先祭祀司祭権等は明確であった。しかし財産共有制は存在せず、各家の資産所有関係は独立的であった。もつとも祖先祭祀のための共有積立金（総有約資産）を蓄積し、これよ司祭の事業全般の一郭二

も運用された。

さらに本家当主が創設した製糸經營純水館は同族各家も出資し、經營は本家を中心複数の同族によって行われた。しかし各家はそれぞれ独立の商店經營を有するなど、同族が総力をあげて一つの製糸經營に取り組む体制にはなつていなかつた。また同族の共有積立金は製糸經營の多額の資金需要にはとても対応できなかつた。こうした同族資本・同族結合のありかたは純水館が急速な発展をみせなかつた一要因として挙げられる。

また各家の商業經營はかなり浮沈が激しく、さらに製糸經營は投機的性格を持たざるをえなかつたから、この傾向は一層顕著になつた。この点では小山家は近代における関東・東山蚕糸業地帯の中小資本を構成する同族団の一つの典型といえよう。

そしてこの同族団は、大正後期以降の不況・恐慌、そして分家の過重な援助などによって本家の經濟的優位性が崩れ、また本家当主の政界進出によって同族結合の軸たる祖先祭祀のイベントまで厳密に行われなくなると、同族結合は大きく弛緩してゆき、親睦的な同姓集團へと変容していった。